

コトホギ

コトホギ

作・中野浩作

○登場人物

カサバリ・・・仕事に疲れた女。一つの鞆を持っている。

自ら望んで手にした物や紐づく出来事を手放せず、閉塞感を感じている。

ウチステ・・・列車の案内人。幽霊のような雰囲気をもっているが、人間である。

他者から与えられたもので自らを縛り付けており、列車に囚われている。

1

雑踏。

駅のホームである。

人の往来。

ウチステ、登場。

ドレス姿である。

ウチステ、ゆっくりとした歩みで、中央へ。

ウチステ、周囲の雑踏（観客たちを通して）を眺める。

様々な人が歩いている。仕事の最中の足早な人、ゆっくり歩く親子連れ。だまになって歩く高校生の集団。カップル、老人。

突然、雑踏が消える。

2

ウチステ「（素敵な笑顔で楽しげである。しかし、その語り口にはどこか含みがある。）

その日は、お祝いの日で。

何のお祝いだったのか、そういうのは覚えていないのだけれど、

けれど、確かに、お祝いの日ではあって。たくさんの花があって、たくさんの笑

い声があった。

・・・私は、そこに「あった」。

「いた」、のではなく、「あった」。

私は、そこに、あった。

誰かが、私に向けて言った。

『今日も可愛いね』

私は笑った。

『今日も大人しいね』

私は行儀良くしていた。

『今日も本当にいい子だね』

私は元気に返事をした。

私はそこにあった。いたのではなく、そこにあった。

駅の改札前にある、巨大で綺麗なランドマークのオブジェのように、変わらずそこであって、変わらずずっとそこにあることで、みんなはそれだけで満足だったんだ。

（満面の笑顔で）・・・私は、

（一切のネガティブな気持ちを見せもせずけれど、何か思うところがあるという印象で）・・・どこにあったんだろう？

（その疑問は答えを求めているわけではなく、ただ自らのうちに浮かんだ疑問が口に出ただけという印象）

（ふと、目線を変えて）ちらちらと、花びらが落ちた。

花びらを目で追った先に、コトホギは、現れた」

雑踏、戻ってくる。

列車の音が近づき、停車する。

ドアの開閉音。

ウチステ、列車に乗り込み、座席に座る。

ややあつて、

カサバリ登場。

人ごみをぬうようにして歩いてくる。

やや大きめの鞆を持っている。

カサバリ「あ、のりまゝす！ のりまゝす！」

バタバタと人ごみを抜けてくるカサバリ。

喧しい印象。

カサバリ「ちょっと、すいません、あ、ごめんなさい。ああ、ごめんなさい、すいません。

あ、乗りますって！ 乗りますすー！」

カサバリ、駆け込み乗車に成功する。

カサバリ、列車内の他の乗客に気を遣って、へらへらしながら、座席に座る。

カサバリ「（へらへらしながら）今日も残業だった。実際、定時で帰れるとか別に思っていない。そもそも、定時とは、という感覚もある。学生のバイトじゃない。いい大人になったし、いい大人であるべきだと思うし、そういうことを別に考えなくても、

いい大人である。

いい大人は自分の人生を考えて仕事に勤しむもんだ。雇われながら自分の本当
にしたいと考えることを仕事にすべく、家に帰ったら勉強とか副業の設計とか、
そういうのを、する。

休みのスタイルとか、働き方とか、自分の好きで望ましい形にして、それで、自
分の好きなように、好きなことをできるように人生を作っていく。

そういうのが出来るのが、いい大人。

（顔は笑っている）・・・・・・だと、思ってたけどなあ・・・・」

カサバリ、自分の荷物を抱えて、ぼんやり車窓から真っ黒な外を見る。

列車の走行音。

カサバリは列車のリズムに合わせて体が揺れるが、ウチステは微動だにしない。

カサバリ、しばらく窓の外を見ているが、やがて眠ってしまう。

列車の停止する音、ドアの開閉音。

再び、列車の走行音。

列車の停止する音、ドアの開閉音。

再び、列車の走行音。

ウチステ、笑顔である。

ウチステ、立ち上がり、カサバリの隣に座る。

列車の走行音。

列車の停止する音。

ウチステ、カサバリの肩に触れる。

カサバリ、ビクツとなりながら起きる。

カサバリ「ふえっ！？ あっ！？ えっ！？」

と、窓の外を見て、反射的に、

カサバリ「あ、降ります！ 降ります！」

バタバタと立ち上がるが無情にもドアは閉まる。

カサバリ「あ~~~~」

と、カサバリ、ふと、窓の外の風景を見る。

知らない街並みである。

カサバリ「・・・ん？ どこ？ え？」

おかしいな、と思いつつ、車内も見渡す。
車内には誰もいない。

カサバリ「（小さな声で）誰もいない・・・？」

何かの気配を感じながら、カサバリ、意を決して振り返る。
そこにウチステがカサバリを見て座っている。

カサバリ「うへああ！！！！？」

カサバリ、あんまり驚いて床に倒れ込む。

車内アナウンス「本日は環状鉄道コトホギ88系にご乗車いただきまして、誠にありがとうございます。
ございます。当列車に始発駅および終着駅はございません。降車をご希望
のお客様は、どうぞ、ご自身のお荷物を花葬（かそう）してください。案
内係がご対応させていただきます。ぐるぐる回る環状鉄道、本日のご利用、
誠にありがとうございます」

カサバリ、アナウンスを呆然と聞いている。
しばし、沈黙。

カサバリ「火葬・・・？」

ウチステ「こんばんは」

カサバリ「へっ？」

ウチステ「こんばんは」

カサバリ「こ、こんばんは??？」

ウチステ「（天井（アナウンス声）をゆっくり指さして、）わかった？」

カサバリ「は？」

ウチステ「わかった？」

カサバリ「何が？」

ウチステ「はじめまして」

カサバリ「はじめまして？」

ウチステ「(自分に手を当てて) ウチステ。この列車の案内係」

カサバリ「はい？」

ウチステ「ウチステと言います」

カサバリ「何、名前？」

ウチステ「はじめまして」

カサバリ「はじめまして・・・？」

ウチステ「カサバラリツコさん」

カサバリ「(名前を言い当てられたことに驚き) ええ？

・・・何、こわ、え、こわい。

(ふと、) え、あの、さっき火葬って・・・。

この電車って、やっぱり、そういう感じの・・・」

ウチステ「そう、そういう感じの」

カサバリ「(ため息) はあああああ・・・。

・・・死ぬの？ それとも、死んだの？ この、この、この電車はでっかい棺桶で、そのまま地獄の業火的なところに走って言って、めっちゃ燃えて、火葬されてめっちゃ燃やされて、私は地獄の業火的なもので生きたまま焼かれて、あちら側に行くということでしょうか？」

ウチステ「どこにも行かないよ。生きたまま焼かれもしないし、地獄の業火的なものもない。

そもそも、火葬は、(はつきりと) か・そ・う」

カサバリ「だからそれって、燃やされて骨になってなんまいだ、ってことでしょ？」

ウチステ「違う違う！ 花になってひらひら舞ってさようならってこと」

カサバリ「火で葬る」

ウチステ「花になって葬る」

カサバリ「花になる？」

ウチステ「厳密には花びらになる」

カサバリ「何が？」

ウチステ「あなたの荷物」

カサバリ「なんで？」

ウチステ「コトホギはそういう列車なの」

カサバリ「コトホギ？」

ウチステ「この列車の名前だよ？」

カサバリ「皮肉？」

ウチステ「何が？」

カサバリ「葬るのを祝うってことでしょ？」

ウチステ「・・・ああ！ 頭いいね！ 皮肉じゃないよ」

カサバリ「わけが——」

ウチステ「わからなくても」

カサバリ「・・・」

ウチステ「わけがわからなくても、あなたの前にこの列車は現れた。現れて、乗ってしまった。あなたはこの列車で弔わなければなりません！」

カサバリ「私の荷物を？」

ウチステ「ううん。厳密には違う」

ウチステ、カサバリをじっと見つめて。

ウチステ「嵩張り嵩んでどこにも行けず、

望んだ未来に行けもせず、

ぐるぐる回るあなたの人生、

手荷物ばかりが増えていく。

増えて嵩んで重たくて、沈んだ身体を感じては、

いつもへらへら笑いつつ、

こんなもんかと

嘲、笑う」

カサバリ「やめて」

ウチステ「カサバリさん」

カサバリ「やめて」

妙な緊張感。

列車の走行音が大きくなり、ややあつて、

アナウンス「停車いたします。お降りの方は係りの者に従い、お荷物を花葬してください」

列車が停止する。

ドアの開閉音。

カサバリ「(ほっとして) なんだ、停まるんじゃない。

じゃあ、私、降りるから。どうぞ、お好きに、火葬でもなんでもしてください」

カサバリ、降りようとする。
が、

カサバリ「え？」

足がドアの向こうに出ない。

カサバリ、踏ん張って進もうとするがどうにもならない。

アナウンス「発車いたします。ご注意ください」

カサバリ「ちよっと！ 降りる、降りるから！ なにこれ、どうなってんの！？」

ドア、閉まる。

再び列車の走行音。

カサバリ、呆然と立ち尽くしている。

アナウンス「お降りの方は、ご自身のお荷物を花葬してください」

ウチステ「……」

カサバリ「……花葬？」

ウチステ「荷物を見せてくださーい」

カサバリ「やだ」

ウチステ「でも、降りれないよ？」

カサバリ「（ため息）何い、これ」

ウチステ「カサバリさん」

カサバリ「……」

ウチステ「嵩張るあなたの荷物を見せて」

カサバリ、ウチステを睨みつける。

カサバリ、ウチステに鞆を渡す。
ウチステ、カサバリの鞆を開く。

カサバリ「カサバリ、とは、私のあだ名。」

カサバリツコ、だからカサバリ。

（何か思うところがあるといった雰囲気）あと……。昔からいつも荷物が多い。なんだか知らないんだけど、なんでかいつもやたらと荷物が多い。しかも、大抵の場合、多すぎる荷物のほとんどは他人（ひと）にとって大して役にも立たないモノばかりで、『嵩張る癖に役に立たない。』そんなニュアンスもあだ名に含まれてる感じがして、すごく、嫌だ。
ってか、荷物が多い人がなんでもかんでも役に立つものばかり持つてゐるわけないじゃん。自分でもなんでこんなに多いのかわかってないのに。そりゃ、電車乗るときとか舌打ちされたり、デートの時にちょっと引かれたりするけど、しょうがないじゃん。

でも、捨てたら困る気がしてる。何に困るのかは、よくわかんないんだけど。」
ウチステ「なにこれ？」

ウチステ、束ねられたレシートを取り出す。

カサバリ「見てわかんない？ レシート」

ウチステ「こんなに？」

カサバリ「買ったから」

ウチステ「捨てないの？」

カサバリ「捨てるよ、あとで」

ウチステ「（レシートを取り出しながら）あとで、がいっぱい」

カサバリ「・・・あとで、を溜めてるの」

ウチステ「（レシートをめくりつつ）コンビニ、ドラッグストア、コンビニ、コンビニ、駅

のパン屋」

カサバリ「読むな、読むな。いや、別に見られて困るもんじゃないけど、」

ウチステ「これは大事なものの？」

カサバリ「全然」

ウチステ「（笑顔でカサバリを見つめる）・・・」

カサバリ「何？」

ウチステ「別に」

ウチステ、レシートを脇に置き、次の荷物を探る。
カサバリ、ウチステに聞きにくいことを聞く感じで、

カサバリ「あのさ」

ウチステ「何？」

カサバリ「あなたって、何？」

ウチステ「ウチステです」

カサバリ「そじゃなくて」

ウチステ「案内係です」

カサバリ「そうでもなくて」

ウチステ「じゃあ、何？」

カサバリ「・・・幽霊なの？」

ウチステ「・・・どう思う？」

カサバリ「・・・・・・やっぱり？」

ウチステ「(何も答えず、荷物に視線を移す)」

カサバリ「・・・やっぱり。はじめて見た。地縛霊？ 地縛霊なの？」

あ、それか、この列車の化身みたいな、あ、わかった、列車の名前がコトホギだから、打ち捨てられた祝い事の化身みたいな、そんな感じ？？？？

でも打ち捨てられた祝い事の化身は何？ あ、でも手足あるんだね、最近の界限ではそういうの主流なの？」

ウチステ「(全く無視) これは何？」

ウチステ、キャンディを取り出す。

カサバリ「飴ちゃん」

ウチステ「いっぱいあるねえ」

カサバリ「糖分補給は大事なの。」

知ってる？ 脳みそってブドウ糖がメインのエネルギー源なのね、だから、疲れた時の糖分摂取は非常に合理的なわけ。しかも飴ちゃんは噛まずに摂れるから、会議中、移動中、残業中、あらゆる場面に対応可能。つまり、社会人の鞆に一粒入っているだけで、戦術的優位性が発生するわけ、でね——」

ウチステ「でも、こんなに要る？」

カサバリ「要る。配ったりするし」

ウチステ「全然減ってないけど？」

カサバリ「需要と供給が合わない時だってあるの」

ウチステ「これも大事？」

カサバリ「・・・別に」

ウチステ「そう、じゃあ、（次の品を取り出しつつ）これも同じ理由？」

ウチステ、栄養ドリンクの箱を取り出す。

カサバリ「そ。仕事忙しい時にね。エナドリよりは栄養ドリンクでしょ」

ウチステ「一箱は邪魔じゃない？」

カサバリ「それも、ほら、配るときあるから」

ウチステ「全然減ってないけど？」

カサバリ「需要と供給が合わない時だってあるの」

ウチステ「これも大事？」

カサバリ「・・・別に」

アナウンス「まもなく、列車が停車します。

お降りの方は、お荷物を案内係にお荷物をご提示ください」

列車、停車して扉が開く。

カサバリ、鞆を閉じて、持ち上げる。

カサバリ「これで〇×なんでしょ？ 荷物は見せたから、もう降りられる」

ウチステ「さあ？」

カサバリ「（不審に思いながら）それじゃあ失礼します。あ、成仏してね」

カサバリ、ウチステに合掌して出ようとする。
が、

カサバリ「（足を扉の外に出そうとするが出れない）え？」

アナウンス「扉が閉まります。ご注意ください」

カサバリ「え！ ちょっと！！」

扉が閉まり、列車が発車する。

カサバリ、呆然とする。

ウチステ、カサバリの鞆を再び持ち、

ウチステ「まあ、そういうことだから」

ウチステ、カサバリの鞆を開く。

カサバリ「何い、これ」

ウチステ「カサバリさん、荷物を見せるだけじゃ、ダメ。

花葬とは、大事だったのに、もうそのままでは持っていけないものを見送ること
なのです」

カサバリ「・・・」

ウチステ「どうでもいいものは、花葬できない」

カサバリ「なんで」

ウチステ「だって大事じゃないもん。レシートとか、飴玉とか、そういうのでなく、もっと、
大事で大切なもの」

カサバリ「・・・そんなの、知らないし、大体、今、持ってるわけないでしょ」

ウチステ「今かどうかは関係ないよ。だってここは環状鉄道コトホギ。

どこにも行かないなら、どこでも行ける。だから、時間も場所も、関係ない。

例えば――」

ウチステ、鞆の中から何かを取り出す。

どうやら何かのチケットのようである。

ウチステ「（やや早口に）2024年10月3日 芸術文化センター三階、大ホール」

カサバリ「・・・え？ なんで？」

ウチステ「これはなに？」

カサバリ「なんでそれが？」

ウチステ「だから、時間も場所も関係ないの。だってこの鞆はカサバリさんの鞆でしょ？

カサバリさんの大事だと思っている物がたくさん詰まっている鞆でしょ？ だ
ったら、ここにはカサバリさんの大事だと思ってるものが――」

カサバリ「（言い知れぬ危機感から）やめて！」

カサバリ、ウチステから鞆を奪い取る。

カサバリ「やめて」

ウチステ「（ひどく笑顔で）・・・カサバリさんはどこに行くの？」

カサバリ「家に帰る」

ウチステ「家に帰って何をするの？」

カサバリ「家に帰って、色々するの」

ウチステ「色々ってなに？」

カサバリ「色々は色々」

ウチステ「カサバリさん、その色々はいつからやっていて、いつもやっていて、けど、いつもやろうとしていることなんじゃないの？」

カサバリ「・・・うるさい」

ウチステ「お家に帰ったら、その鞆を下ろして、お風呂に入って、ぼんやりして、眠るだけ？」

カサバリ「うるさい」

ウチステ「ぐるぐるぐるぐる同じこと。ぐるぐるぐるぐる同じ日々。この列車のように」

カサバリ「・・・」

ウチステ「そんな毎日を幸せだと感じる事が出来るほど満足できるのなら、どんなによかったんだろうね。笑顔でへらへら笑って、満足いつてない自分を飲み込んで、くしゃくしゃになったレシートの束に埋もれて、栄養ドリンクを飲み下して、誰にも渡さない飴玉をなめ続けて、色々の詰まった大きな荷物を抱えて持って、どこにも行けずに色々が嵩張るあなたに誰かが舌打ちをする。いつもかも、へらへら笑って、それが、あなた？」

カサバリ「・・・あんた、何がしたいの？」

ウチステ「お弔い、だよ？」

カサバリ「やっぱりあんた幽霊だ」

ウチステ「おんなじ毎日ぐるぐる回って、出られない。私を幽霊というなら、カサバリさんも一緒にしょ？」

後生大事なお荷物を、

いっぱいたくさん抱きかかえ、

要らないものが詰まってる、

自分の鞆を捨てられず、

毎日おんなじ電車に乗って、

・・・どこに行くの？」

カサバリ「私は・・・」

カサバリ、呆然としてしまう。

ウチステ、そっと鞆をカサバリの手から取る。

ウチステ、鞆を開き、先ほどのチケットを手にする。

カサバリ、うつむいている。

ウチステ「(繰り返し) 2024年10月3日 芸術文化センター三階、大ホール 演劇公演」

カサバリ「・・・」

ウチステ「2020年8月23日 ワンマンライブ ライブハウス×× (※何でもよい)」

カサバリ「・・・」

ウチステ「2019年1月15日 新春落語独演会 ○○演芸場 (※何でもよい)」

カサバリ「・・・友達なんか、イベント。行けなかったやつ」
ウチステ「全部？」

カサバリ「うん」

ウチステ「なんで？」

カサバリ「忙しかったから」

ウチステ「でも、買ったんでしょ？」

カサバリ「買った。手売り分だから、先にお金払ったし」

ウチステ「行かなかったチケット」

カサバリ「行けなかった、それに、それもう私失くしたはずなんだけど？」

ウチステ「だから、時間も場所も関係ないんだって」

カサバリ「都合のいい」

ウチステ「本当に行きたかったの？」

カサバリ「・・・付き合いつてのがあるでしょ？」

ウチステ「私には、ない」

カサバリ「(列車を見回し) まあ、こんなところじゃね」

ウチステ「大事だったの？」

カサバリ「さあ？ でも、なんだろう、約束破ったからかな。ずっと覚えてるんだ。すごい昔のことなのに・・・きつと、行ったら羨ましいって思ったからかな」

ウチステ「羨ましい？」

カサバリ「なんか、自分の好きなことやってる人のこと見るのがさ、なんか、悔しいって思っちゃいそうで。学生の頃はまだしも、仕事してて、疲れてて、生活するの大変だからさ、だから——」

ウチステ「行かなかったから、捨てられない」

カサバリ「だから捨てたの、引っ張り出したのあんたでしょ」

ウチステ「でも、ずっと気になってたんでしょ？」

カサバリ「行きたくなかったわけじゃない」

ウチステ「うん」

カサバリ「行きたかったよ」

ウチステ「うん」

カサバリ「でも、行けなかったの」

ウチステ「約束は、もう終わってる」

カサバリ「・・・」

ウチステ「あなたはあの日にいた。けど、あなたはもう、あの日にいない。
だから、」

ウチステ、手を差し出し、開く。

花びらが舞う。

ウチステ「(花びらを見つめて) あの日のあなたを、花葬した」

列車の停止音。

ドアの開く音。

カサバリ、ドアを見る。

ウチステ、にこりと笑って、ドアを指し示す。

カサバリ、鞆を持って、ドアから出ようとする。
が、

カサバリ「(足を扉の外に出そうとするが出れない) え？」

アナウンス「扉が閉まります。ご注意ください」

カサバリ「え！ ちょっと!!」

扉の閉まる音。

列車の走行音。

カサバリ、倒れて呆然としている。

ウチステ「(わざとらしく) あれ？ おかしいな？」

カサバリ「今のが花葬じゃないの!？」

ウチステ「まだ残ってるんじゃないかな？」

カサバリ「はあ？ まだやるの？ 勘弁してよお」

ウチステ「(ふと) あ、そうだ。カサバリさん、私ね、実は幽霊じゃないの」

カサバリ「はあ？ ……え？ だって、幽霊でしょ？ なんか、さっきから、私の鞆、四次元なんちゃらっぽい何かにしたじゃん。それに、こんな気持ち悪い状況にいるのなんて、幽霊か、なんか変な化け物かの二択でしょ？」

ウチステ「打ち捨てられた祝いの化身？」

カサバリ「そうそう」

ウチステ「(笑顔で) 降りられないだけ」

カサバリ「は？」

ウチステ「花葬するものがないから降りられない」

カサバリ「…じゃあ、なんで乗ってるの？」

ウチステ「さあ」

カサバリ「いつから乗ってるの？」

ウチステ「ずっとだよ」

コトホギ

3

カサバリ「ずっと？」
ウチステ「ずーーーーーと、ここにいる」

列車の走行音、大きくなる。

カサバリ「ずっとって、どれぐらいのずっと？」

ウチステ「さあ」

カサバリ「何か月とか、何年とか、・・・何十年とか」

ウチステ「数えたことない」

カサバリ「なんで？ 降りたいとか思わなかったの？」

ウチステ「ん？ うん。必要なかったから」

カサバリ「必要なかった？」

ウチステ「・・・そういうの、考えなくてよかったから」

カサバリ「ん？」

ウチステ「・・・」

カサバリ「考えなくてよかった、は何の話？」

ウチステ「みんなが」

カサバリ「みんな？」

ウチステ「みんながね、私に向かって言うの。」

『可愛いね』『大人しいね』『いい子だね』だから私は、そうしてた」

カサバリ「・・・何の話？」

ウチステ「そうしてると、みんな、喜ぶんだよ」

カサバリ「喜ぶ？」

ウチステ「たまに違うことをすると、言われるの。」

そんなのあなたらしくない。そんなことあなたはしない。それは、あなたじゃない。だから私はしなかった。そういうことを続けているとね、カサバリさん、だんだん、何にも考えなくてよくなるんだよ。考えなくなると、感じなくなる。感じなくなると、言わなくてよくなる」

カサバリ「よくないでしょ」

ウチステ「楽だったよ」

カサバリ「楽？」

ウチステ「私が黙って笑っていると、みんな安心する。安心して、好きなことを言う。

良いことも、そうじゃないことも。・・・でも、もう、あんまり違いがなかった」

カサバリ「そんなのやでしょ。良いこと言われても、悪口とか言われて、」

ウチステ「私に言ってる言葉じゃないんだよ。だって、私は何も考えていないんだから、みんなが決めた私に向かって、みんな言っているだけ。だから私は嫌とかひどいとも思わない」

カサバリ「なにそれ」

ウチステ「祝福も、悪意も、変わらない。私の方向に向かって言うだけで満足。何も言わない私に向かって、ただ言いたいことを口にする。でもね、そんな風になっている

な言葉を投げかけられているうちに、何が自分のものだったのか、わからなくな
った」

カサバリ「・・・あんたが大事にしているもの」

ウチステ「そんなのないよ」

カサバリ「え？ ないの？ 今、めちゃくちゃ『ある』みたいな話してたじゃん」

ウチステ「何にもない」

（妙にはっきりと）私は何も持っていない。家族も友達も大切な物も、大切な思
い出も、大切な出来事も全部、私のじゃない」

カサバリ「は？」

ウチステ「まるで綺麗なドレスを着せるお人形のように、都合のいい言葉で着飾って、都合
のいいように振舞って、誰かと何かの添え物のようにして、誰かの言葉の通りに
生きてたら、

コトホギの扉が開いたの」

カサバリ「・・・」

ウチステ「私には何にもない。だから、ずっとここにいる」

ウチステ、満面の笑みである。

少しの沈黙。

列車の走行音。

カサバリ「（ウチステをじっと見つめて）・・・なに、その顔」

ウチステ「どの顔？」

カサバリ「今の話をなんでそんな顔してできるの？」

ウチステ「そんな顔？」

カサバリ「笑うことじゃないでしょ」

ウチステ「笑ってる？」

カサバリ「すごい笑ってる」

ウチステ「よかった。これ、普通の笑顔に見えてるんだ」

カサバリ「は？」

ウチステ「もうね、どんな顔してたかもわかんないんだよ。自分の意志で笑っているわけじ
ゃないから、ちゃんと笑えているのかわからない」

カサバリ「それ、誰かに怒っていいやつじゃないの？」

ウチステ「怒る？」

カサバリ「いや、知らんけど、怒るとか、泣くとか、なんかあるでしょ」

ウチステ「だから、ないよ」

カサバリ「ないことはないでしょ」

ウチステ「ないものはないよ」

カサバリ「じゃあ、やめればいいじゃん」

ウチステ「何を？」

カサバリ「笑うの。それあんたのじゃないんでしょ？」

ウチステ「うん」

カサバリ「じゃあ、やめなよ」

ウチステ「これしか私の持ち物ないのに？」

カサバリ「(何かを察して)・・・」

ウチステ「・・・試したことなかったな。・・・笑うのやめてみようかな。どうなるかな」

カサバリ「ちよつと、やめてって、それでもし、あんたが花びらになったら、私出れないじ

ゃん！」

ウチステ「ああ、そっか」

少しの沈黙。

列車の走行音。

カサバリ「・・・ごめん」

ウチステ「うん」

カサバリ「いや、うん、じゃなくて」

ウチステ「ごめんって言われた時の顔、わからないから」

カサバリ「・・・」

ウチステ「とりあえず、」

ウチステ、にこりと笑う。

カサバリ「・・・その顔、困る」

ウチステ「困る？」

カサバリ「どう受ければいいか・・・」

ウチステ「受け取らなくていいよ」

カサバリ「聞いちゃったんだから、そういうわけにもいかないでしょ」

ウチステ「じゃあ、預かっておいて」

カサバリ「預かる？」

ウチステ「うん。今は、あなたの荷物が先」

カサバリ「ここでそれに戻る？」

ウチステ「戻るんじゃないよ。進むの。カサバリさんが降りないと、私の荷物までは行けない」

カサバリ「私が降りたら、何とかなるの？」

ウチステ「わからない」

カサバリ「わからないのかよ」

ウチステ「でも、今のままでは、何も変わらない」

カサバリ「・・・」

ウチステ「だから、先に、あなた」

カサバリ「・・・納得はしてないけど、順番は、わかった」

ウチステ「OK」

カサバリ「・・・まあ、思い当たる節の一つや二つあるしね」

ウチステ「一つや二つで収まるなら、カサバリなんてあだ名はつかないんじゃない？」

カサバリ「嫌なやつ」

ウチステ「案内係です」

カサバリ「便利な肩書きなこと」

ウチステ「（満面の笑みで）じゃあ、嵩張ってる荷物、いっぺんに行ってみる？」

カサバリ「は？」

ウチステ、カサバリの荷物を開く。

先ほどまでとは違う様子。

丁寧に探るのではなく、割と無造作に鞆の底に手を入れていくウチステ。
カサバリ、少し身構える。

カサバリ「ちょっと待って」

ウチステ「待たない」

カサバリ「いっぺんに行くって、何」

ウチステ「いっぺんに行くってこと」

カサバリ「説明になってない」

ウチステ「溜まってるものは、まとめてほどける時がある」

カサバリ「怖いこと言うな」

ウチステ「花葬だから」

カサバリ「だから怖いんだって」

ウチステ、古い手帳を取り出す。

表紙は少し擦れている。

最初の数ページだけ、やたらと書き込みがある。

ウチステ「手帳」

カサバリ「・・・ただの手帳」

ウチステ「『今年こそ』」

カサバリ「読むな」

ウチステ「『生活を変える』」

カサバリ「読むなって」

ウチステ「『好きなことで生きる準備』」

カサバリ「・・・毎年書くんだよ、そういうの。年始とか、誕生日とか。今年こそ、来年こそ、今年こそ。書いてる時は本気。本当に、そうなる気がしてる」

ウチステ「うん。それでいいんじゃない？ 『来年を待っていたあなた』」

手帳から、花びらが一枚落ちる。

カサバリ「早くない？」

ウチステ「大切だったものの、意味があったもの。だから手放せない」

カサバリ「今はそうじゃないのに、あの時の私が手放さない。だから、嵩張ってく」

ウチステ「そうそう。わかってきたじゃん」

カサバリ「言い方」

ウチステ、付箋の束を取り出す。

同じような文字が何枚も書かれている。

ウチステ「付箋」

カサバリ「・・・」

ウチステ「『あとで』」

カサバリ「やめて」

ウチステ「『あとで返信』」

カサバリ「やめてって」

ウチステ「『あとで調べる』」

カサバリ「・・・」

ウチステ「『あとで申し込む』」

カサバリ「ちゃんとするつもりだったんだよ。その時は。あとでって書くと、ちょっと安心

する。今やらなくていい理由が、ちゃんと紙になる感じ」

ウチステ「今日を逃がしていたあなた」

付箋の束から、花びらが散る。

さつきより少し多い。

カサバリ「多いな」

ウチステ「次」

カサバリ「そこは流すんだ」

ウチステ、小さい靴べらを取り出す。

ウチステ「靴べら？」

カサバリ「それは便利なやつ」

ウチステ「小さい」

カサバリ「持ち歩き用だから」

ウチステ「使ってる？」

カサバリ「たまに」

ウチステ「たまに」

カサバリ「いや、あると安心するじゃん。出先で靴が履きにくい時とか、急いでる時とか、

ちゃんとした場所に行く時とか。そういうの持っていると、ちゃんとしてる感じがす

るし」

ウチステ「ちゃんとしてる感じ」

カサバリ「そう。使うかどうかじゃなくて、ちゃんとしてる側にいる感じがする。鞆の中に、

ちゃんとしたものが入っていると、私もそっち側っぽいじゃん」

ウチステ「ちゃんとしているふりを支えていたあなた」

鞆べらから、花びら。

カサバリ「鞆べらにそこまで背負わせる？」

ウチステ「背負わせたのはカサバリさん」

カサバリ「嫌な返し」

ウチステ、カーディガンを取り出す。

丁寧に畳まれているようで、少しくたびれている。

ウチステ「カーディガン」

カサバリ「それは普通に要る」

ウチステ「寒い時」

カサバリ「冷房とか。電車とか。職場とか」

ウチステ「暑い日も持ってる」

カサバリ「冷えるかもしれないでしょ」

ウチステ「かもしれない」

カサバリ「寒いかもしれない。浮くかもしれない。汚れるかもしれない。ちゃんとしてない
って思われるかもしれない。なんか、羽織るものがあると、ちょっとだけ安心す
るの」

ウチステ「隠すもの」

カサバリ「隠すっていうか」

ウチステ「守るもの」

カサバリ「守ってるのか隠してるのか、たまにわかんなくなる」

ウチステ「見られないように、包んでいたあなた」

カーディガンから、花びら。

カサバリ「ちょっと、もったいないな」

ウチステ「まだ持っていていく？」

カサバリ「まあ、たぶん、それ、もう寒さ用じゃなかったんだよね」

ウチステ「花葬」

さらに花びら。

ウチステ、あやとりの紐を取り出す。

古く、少し色あせた紐。

ウチステ「あやとり」

カサバリ「懐かしっ」

ウチステ「カサバリさんの鞆だから」

カサバリ「いや、でも、それは違うでしょ。小学生じゃないんだから」

ウチステ「でも、ある」

カサバリ「・・・」

ウチステ「できる？」

カサバリ「何を」

ウチステ「あやとり」

カサバリ「・・・たぶん。東京タワーとか、ほうきとか。昔はできた」

ウチステ「昔は」

カサバリ「指が覚えてるんだよね。でも、たぶんほどけなくなって、イライラして、捨てる

と思う」

ウチステ「あやとりなのに」

カサバリ「遊びなのにね。自分で絡ませて、自分でほどけなくなって、腹立てるの。意味わ

かんないね」

ウチステ「自分で作ったのに、ほどけなくなったあなた」

あやとりの紐から、花びら。

カサバリ「ちょっと嫌だな」

ウチステ「何が？」

カサバリ「昔は、ほどけたところ」

少しの沈黙。

カサバリ「昔はさ。絡まっても、こうしたら戻るとか、こっち引いたらほどけるとか、わか

ってた気がする。今は、全部、引っ張ると余計絡まる感じがする」

ウチステ「ほどこ方を忘れたあなた」

さらに花びら。

ウチステ「次」

カサバリ「まだあるのか」

ウチステ、古い封筒を取り出す。

少し黄ばんでいる。

封筒には、拙い字で宛名が書かれている。

ウチステ「手紙」

カサバリ「・・・それは、やめて」

ウチステ『大人の私へ』

カサバリ「読むな」

ウチステ「中学生のカサバリさんから」

カサバリ「読むなって」

ウチステ「読まない」

カサバリ「・・・」

ウチステ「でも、持ってた」

カサバリ「持ってたっていうか、捨てられなかったの。こういうの捨てると、なんか悪いじゃない。昔の自分に」

ウチステ「大人のあなたは、読んだ？」

カサバリ「・・・読んだ」

ウチステ「どうだった？」

カサバリ「覚えてない」

ウチステ「覚えてる」

カサバリ「・・・」

ウチステ「何が書いてあった？」

カサバリ「・・・ちゃんと、好きなことしてますか、とか。友達いますか、とか。どんな仕事してますか、とか。毎日楽しいですか、とか。そういう、普通のやつ」

ウチステ「普通」

カサバリ「普通だよ。中学生の自分なんて、大人になれば全部変わると思うじゃん。大人になったら、なんか、自分になれるって」

沈黙。

ウチステ「大人になれば、自分になれると思っていたあなた」

手紙から、花びら。

カサバリ「突然、ウチステの手を掴む」待って」

ウチステ「待たない」

カサバリ「これは、待って」

ウチステ「どうして？」

カサバリ「昔の私がかawaiiそうじゃん」

ウチステ「かawaiiそう？」

カサバリ「かawaiiそうっていうか。なんか、悪いじゃん」

ウチステ「何が」

カサバリ「大人になったら、自分になれるって信じてたのに」

ウチステ「なれなかった？」

カサバリ「・・・わかんない。でも、たぶん、あの子が思ってた大人ではなかった。その後
の私でもなかった。今の私でも、たぶん違う」

ウチステ「昔のあなたに謝り続けていたあなた」

さらに花びら。

カサバリ「・・・それは、反則でしょ」

ウチステ「反則？」

カサバリ「ってか、困る」

ウチステ「困る？」

カサバリ「困る。もう、何に謝ってたのかわかんなくなる」

ウチステ、書きかけの退職願を取り出す。

カサバリの表情が明らかに強張る。

カサバリ「・・・それは、やめて」

ウチステ「退職願」

カサバリ「読まなくていい」

ウチステ「日付がない」

カサバリ「出してないから」

ウチステ「出さなかった」

カサバリ「出せるわけないでしょ。生活あるし、家賃あるし、お金いるし。辞めたところで、
何ができるのって話だし。・・・辞めれば変わるって思ってるうちは、辞めても

変わらないじゃん」

ウチステ「知ってた」

カサバリ「知ってたよ」

ウチステ「でも、持ってた」

カサバリ「持ってた。辞めれば、どこか行けると思ってた。ここじゃないどこか。今じゃない何か。私じゃない私。そういうの、紙にしたかったんだと思う」

ウチステ「場所を変えれば、自分も変わると思っていたあなた」

退職願から、花びら。

今までより多く舞う。

カサバリ、黙って見ている。

ウチステ「花葬」

カサバリ「・・・ねえ」

ウチステ「なに？」

カサバリ「これ、全部捨ててる？」

ウチステ「捨ててない」

カサバリ「じゃあ、何してるの」

ウチステ「昔のあなたを、花で散らして、葬って、吊ってる」

カサバリ「昔の私」

ウチステ「行けなかったあなた。

来年を待ちあとでに逃がし、ちゃんとしているふりを支え、見られないように包み込み、ほどこき方を忘れ、大人に期待し、けれど、昔に謝り続けていた、あなた。どこかへ行けると思っていたあなた」

カサバリ「・・・」

ウチステ「ここまでが、昔のあなた」

カサバリ「じゃあ、今の私は？」

ウチステ「まだ乗ってる」

少しの沈黙。

ウチステ、鞆の底に手を入れる。

しかし、今度は何も取り出さない。

カサバリ「・・・何」

ウチステ「ない」

カサバリ「ない？」

ウチステ「もう、物はない」

カサバリ「じゃあ、終わり？」

ウチステ「まだある」

カサバリ「何が」

ウチステ「今のあなた」

カサバリ「・・・」

ウチステ「荷物は、花葬した」

カサバリ「したね」

ウチステ「でも、まだ、降りられない」

カサバリ「・・・」

ウチステ「残ってるのは、物じゃない」

カサバリ「・・・私？」

ウチステ「どこにも行けないって、決めているあなた」

カサバリ「決めてない」

ウチステ「決めてる」

カサバリ「決めてないって」

ウチステ「だったら、どうしてまだ乗ってるの？」

沈黙。

ウチステ、カサバリの手を握る。

カサバリ「・・・決めてたら、楽なんだよね」

ウチステ「聞くよ」

カサバリ「行けないって決めてたら、行かなくていい。変われないって決めてたら、変わらなくていい。どうせ無理って思ってたなら、失敗しなくて済む。ちゃんとしたい、って言いながら、ちゃんとしなくて済む」

列車の走行音。

カサバリ「ずっと、ここにいたかったのかな」

ウチステ「ここ？」

カサバリ「どこにも行かなくていい場所」

ウチステ「コトホギ」

カサバリ「いや、最悪。けど、まあ、そうかも」

ウチステ「花になる？」

カサバリ「物じゃないのに？」

ウチステ「目に見えるものばかりが嵩張るわけじゃない」

カサバリ「・・・」
ウチステ「何を、花葬する？」
カサバリ「どこにも行けないって、決めてた私」
ウチステ「ほかに？」
カサバリ「どこにも行かないために、荷物を増やしてた私」
ウチステ「ほかに？」
カサバリ「変わらないで済む理由を探してた私」
ウチステ「それで？」
カサバリ「・・・花葬する」

列車の走行音が、ふっと消える。

カサバリの鞆から、足元から、座席の隙間から、花びらが舞う。
それまでよりも多く。

けれど、荒々しくはなく、静かに。

過去の自分たちを見送るように。

カサバリ、立ち尽くす。

ウチステ、鞆の中から何かを取り出す。

カサバリ「・・・まだあるの？」

ウチステ、鞆の底から白紙の切符を取り出す。

カサバリ「・・・切符？」

ウチステ「白紙の切符」

カサバリ「行き先は？」

ウチステ「どこでしょう？」

カサバリ「使えないじゃん」

ウチステ「使えないなら、花葬する？」

カサバリ、白紙の切符を見る。

カサバリ「しない」

ウチステ「どうして？」

カサバリ「これからのやつだから。どこに行くかは、まだ知らないけど。

でも、これは、持っていく」

アナウンス。

いつもより少しだけ、近く聞こえる。

アナウンス「まもなく、停車いたします。

お降りのお客様は、お手回りのお荷物をお持ちください」

列車の停止音。

ドアの開く音。

カサバリ、白紙の切符を手に持つ。

鞆を持つ。

先ほどよりも軽い。

ドアを見る。

今度は、足が動く。

カサバリ「あ」

ウチステ「(満面の笑みで) おめでとうございます」

カサバリ「やめて。なんか腹立つ」

ウチステ「祝福なのに」

カサバリ「あんたは？」

ウチステ「私は案内係だから」

カサバリ「そうやって終わらせるの、やめなよ」

ウチステ「終わらせる？」

カサバリ「私だけ降りて、あんたはその顔で残るんでしょ」

ウチステ「そうだよ」

カサバリ「違うでしょ」

ウチステ「違う？」

カサバリ「あんたも、あるじゃん」

ウチステ「荷物？」

カサバリ「その笑顔」

ウチステ「これしか持っていない」

カサバリ「だから、それ」

少しの沈黙。

ウチステ「花葬、するの？」

カサバリ「私に聞くな」

ウチステ「案内係なのに？」

カサバリ「あ~~~~~、……自分のことは、自分で決めるんでしょ」

ウチステ「……」

カサバリ「私の時、散々やったじゃん」

ウチステ「そうだね」

カサバリ「じゃあ、やりなよ」

ウチステ「何を？」

カサバリ「何を花葬するのか」

ウチステ「……」

カサバリ「言わなきゃ、花びらにならないんでしょ」

ウチステ、息を一つ吸い、

ウチステ「・・・可愛いね、と言われていた私」

花びらが舞う。

ウチステ「大人しいね、と言われていた私」

花びらが舞う。

ウチステ「いい子だね、と言われていた私」

花びらが舞う。

ウチステ「誰かの言葉で笑っていた私」

花びらが舞う。

ウチステ「何も持っていないと思っていた私」

花びらが舞う。

ウチステ「・・・自分で選べないと思っていた私」

花びらが舞う。

やや沈黙。

ウチステの顔から笑顔が消えている。

どういう顔をすればいいのかわからないという様子のウチステ。

ウチステ「(カサバリの様子を伺って)・・・変？」

カサバリ「知らない」

ウチステ「知らないの？」

カサバリ「あんたの顔でしょ。私が決めることじゃない」

ウチステ「・・・」

カサバリ「でも、まあ、近いんじゃない」

ウチステ「何に？」

カサバリ「あんたに」

ウチステ「私に」

カサバリ「たぶんね」
ウチステ「たぶん」
カサバリ「知らないって」
ウチステ「・・・うん」

ウチステ、自分の手を見る。

その手の中に、いつの間にか白紙の切符がある。

ウチステ「これ」
カサバリ「切符？」
ウチステ「書いてない」
カサバリ「じゃあ、書けば」
ウチステ「どこへ？」
カサバリ「知らない」
ウチステ「また知らない」
カサバリ「知らないから、決めるんでしょ」
ウチステ「決める」
カサバリ「そう」
ウチステ「私が？」
カサバリ「あんたが」

列車の発車音。

アナウンス「まもなく、発車いたします。

お降りのお客様は、お手回りのお荷物をお持ちください」

二人、見つめ合う。

カサバリ「行くよ」

ウチステ「私も？」

カサバリ、一歩外へ出る。

今度は出られる。

カサバリ「出れた」

ウチステ「おめでとうございます」

カサバリ「またそれ？」

ウチステ、少しだけ笑う。

今度は、作った笑顔ではない。

ウチステ、ドアの前に立ち、足を出そうとして、一度止まる。

ウチステ「(何かを迷う)」

カサバリ「大丈夫とは言わん。

ウチステ「・・・」

カサバリ「でも、決めたなら、来れば」

ウチステ「・・・行く」

ウチステ、一歩、外へ出る。

ドアが閉まる。

アナウンス「ご乗車、ありがとうございました。

お持ち帰りになるものは、どうぞ、ご自身で選びください」

列車の走行音。

やがて遠ざかる。

カサバリとウチステ、並んで立っている。

コトホギを見送る二人。

ややあつて、

カサバリ「で、どこ行くの？」

ウチステ「知らない」

カサバリ「でしようね」

ウチステ「カサバリさんは？」

カサバリ「もうカサバリじゃないんでしょ？」

ウチステ「カサバラリツコさん」

カサバリ「そうそう」

ウチステ「で、どこ行くの？」

カサバリ「知らない」

ウチステ「一緒だ」

カサバリ「一緒にしないで」

笑い合う二人。

少しの間。

ウチステ「決めるんでしょう？」

カサバリ「まあ」

ウチステ「私も？」

カサバリ「でしようね」

ウチステ「・・・そっか」

カサバリ「とりあえず私は家に帰る。眠い」

カサバリ、来た道に戻ろうとする、が、ウチステを振り返り、

カサバリ「ああ、そうだ。おめでとうございます」

ウチステ「打ち捨てられた祝いの化身？」

カサバリ「もう、違うでしょ？」

カサバリ、去る。

雑踏。

ウチステ、周囲を過ぎ去る人々をしばし眺め見る。

ウチステ、去る。

舞台上には誰もいなくなり、雑踏。